



新編 五子全

5
5657



冊壹
號四三歌
函三

門八五
號5657
卷

くせは成翁

柳をささぎふらひ

そを世より毘耶居士の犬室よりかきひ
深川よりよまなかにかこころまは菴はななりと
世よりくまをまじ翁ありなるまは経は世より
まは成のよく中にかこ記をたづねるをたづね
らふにまはるる成ありくありまはしりたづねるに
まは草をたづねるに植てむるを菴の名をたづね
はひま標は方にもよまは成の天下に芭蕉の
まはしりてたづねるにまは白格成まはしりたづね
るにまはるる成ありまはしりたづねるに西の



杖のたもと成るはの料敷の敷ひ泉石の
をまひあつにせまきあを休せは身享その
秋此いほり文出ていせ文和の間はあま
記の一篇ありまき筆の何あに野ありしを
心より志ありあつし一の事とせしよひさ
野ありし記のりあふる考運はあつし
骸骨の影いし色をえ声我まきにはけま
よめる趣きあつしてふく無常のむ運成り
本来の面目我又得る人しつらにのれま

あつし人たむいまむわを白く文れ玉成輝き
金成なりとて信り人の魂我あつし
素直公報れつ跋法つてまきくまは心成
の法いせまきと今まきつあつしあつし
ちり記昔積翠老人ありて此記の成りあま
りてあまき人の評論をその体には死出さ
古事詩のあつてまきあつしあつしあつし
あつしあつし文三化法所いせ人の机下にあま
あつしあつしあつし彼ま積成りあつしあつし

つきて梓ののゆたふ及し時も今文化
十一年秋の自風れあきとて後しよま
あま自熱いよと代自津し

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, appearing as ghostly cursive characters.

題 さらさら 紀行翠園抄

○此紀行、貞享元年ゆて桃青四十一歳

ちうろ今世よりさく甲子吟ゆと題す

ものく此記ゆき風園の海船集よせし

ともつる人少くさうろを安永九年秋瓜

門人波静再板せし此題号ハ許六ノ滑

替傳よみあささら紀行の名ゆるとし

かゝ題せし也

千里の旅をて路糧をいふより三更月下
入無何と云々人むしの人乃杖よさうろ

○江湖風月集三山偃溪聞和尚の偈也

路不賚糧笑復歌三更月下入無何本
平誰整閑戈甲王庫初無如是刀
負身甲子秋八月以上の破屋をいつる程
風の来るそと涼寒のま也

形ささらしを心小風の志母を身成

○山家集廿二卷をそのまをそのまをそのまを

ゆけといちきれは路を神ろを

秋十とせらつては石をそのまを

○賈島詩廿客舍并州已十霜歸心日夜

懷咸陽無端更渡桑乾水却望并州是

古郷をせ哉旧里伊賀也東武深川に住す

故母世感あり

孫のゆらり海路を山皆雲をくわく

霧くく進富士をそぬらう向らま

○深川の菴より書廿富士をゆる菊松山

あむらつて却てあをそす

何某ちりともをそそきしこのたすけと

ちりて美いそそ心をしりし侍り常母

莫逆の交あり朋友信あり此人

○唐楊寧與陽城為莫逆交

深川也と世哉をそ富士に於り

○たせいを菴に富士に於り

はらけりてをんて

○本朝文鑑に此文を採りて注曰推子也社
の風いふを同しけりていふをいふは
いふけりて他一辞を立す時、子叙の法
極有と評や富士川の流もまじり流世の
浪よいひて此川をいふ、又いふは
小菰と流、源氏の歌とあり、又母の好也
いふ子、を姓をいふ。○素常此評は富
士川の推子、惻隱の心をもいふる。○
早瀬を枕とて推子をいふ人、さしは流を
いふおま、いふは、いふは、いふは、

ちのうきみら子、いふ人、いふは、
かれとも昔其人の推子、思ふは、
○素常此評は富士川の推子、
大井川越らるる流にき、

秋のふれ、いふは、大井川、
さる上流、
さるのいふ本標、馬ふくを述、
○素常の評、山、流、ま、の、
む、い、け、り、い、の、
○滑稽傳、い、破、り、
正風評をらん、

くゆき司道之の本様くろみくろみ
くゆきくろみくろみ ○ 朗詠集み松柏千年終
是朽槿花一日自為榮下

女り好りの自さすいこえて山の松陰
くゆきくろみくろみ上み報をくろみくろみ
新鳥をくろみくろみ 杜牧り早々の秋夢小秋の
中山みくろみくろみ 忽夢くろみ

くろみくろみくろみくろみくろみ 桑の烟

○杜牧早行 垂鞭信馬行教里未鶏鳴
林下帶殘夢葉落時忽驚霜凝孤雁廻
月曉遠山横僮僕休辭險何時世路平

和柔な風瀑、伊勢み存るるを尋るる行
十くろみくろみ足をとくくろみ標問ふ寸鉄をおひ可
襟み一囊切りけてくろみみ十くろみ珠を推り
僧ふ似て暮らするはくろみ似て入髪くろみ我
僧ふ似てくろみくろみくろみ浮屠の属みくろみ
くろみ神宗み入るるをくろみくろみ

○浮屠又浮圖は梵語也又曰塔婆譯曰
高頭拈くろみ寺院の通稱よ因ゆ故り
僧のくろみくろみくろみくろみ

くろみくろみくろみくろみくろみくろみ
のくろみくろみくろみくろみくろみくろみ
くろみくろみくろみくろみくろみくろみ

あきし 峰の如く身もむくく 深きと海
むく記

みる月ちうし ちをの 杉を抱ゆは

○素常 評 女ゆきし 山田・京の 神杉を

いしき 女し ちをき ちをき ちをき ちをき

おん ちをき ちをき ちをき ちをき

ちをき ○西に 物持 女 神路 山の 峰 ちをき

峰の ちをき ちをき ちをき ちをき

ちをき ちをき ちをき ちをき

ちをき ちをき ちをき ちをき

ちをき ちをき ちをき ちをき

光も ちをき ちをき ちをき 神路 山 月 ちをき

ちをき ちをき ちをき ちをき

○梅 ちをき ちをき ちをき ちをき

ちをき ちをき ちをき ちをき

て 梅 ちをき ちをき

西に 山の 梅 杉 女 ちをき ちをき

ちをき

茶 洗 女 ちをき ちをき ちをき

○素 常 評 女 ちをき ちをき ちをき

ちをき ちをき ちをき ちをき

ちをき ちをき ちをき

久米仙人の物語に女のくまの白きとんぼ
通る矢しんぐいゝるもめとんぼとんぼ
のきんぐり子肥ゆつりつきめく人におのそ
ちりねとくまゆらん

閑人の茅舎をくしり

芳林の竹四曲本のしら

○聯珠詩格劉改之詩如翠竹無多第下

奇止憂喧暗俗人知清風自足老僧用

只是窓前欠好詩

長月のお古ゆいゆつて北堂の萱草もあ
ま果てくまゆつてめちり

○北堂又萱堂氏毛詩如焉得萱草言櫛

之背注萱草令人忘憂背北堂也

何るもやゆつてみまうてくまゆつての怒るる
眉皺まうたうあまそくのいふてくまゆつ
ちまきめあのみのお徳をいけくまゆつて母の
らあおめく浦島の子くまゆつてあ海る相
あむくまゆつてくまゆつてくまゆつて

ゆめくまゆつてくまゆつてくまゆつて秋のお

○樂天詩五年終四十鬢如霜

大和の國あけゆつてくまゆつての那休のゆ
りあまあ被ちくまゆつてあまゆつて

足る休心

○行脚ハ事苑ニ謂遠離郷里脚行天下
晚情捐累尋訪師友求法證悟

こころや野望もみちのこころ心竹の奥

○素学評めくろくをねは毫もさうくさみ
件四立幸の虎心と強家子やせうはあむ
こころけ世人とてあ〜ん〜ん〜ん
ま〜も山崎事々の美そ〜ん〜ん
こころけ〜りの美進ら〜ん〜ん

二上山由麻さよ訪て庭上の松を〜ん〜ん
け〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

ともいふ一人は色非情といふ母佛 縁め
ひふて斧斤の衆をほめ〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

僧侶もほ〜ん〜ん〜ん 法のらら

○和州巡覽記み雷麻寺ハ又禅林寺といふ
用明帝弟四皇子麻苗子親王の産をちり
○白氏集題流溝寺古松烟葉葱託蒼
塵尾霜皮駁落紫龍鱗欲知松老看壁
壁死却題詩幾許人

獨り〜の奥み〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

○順徳院御製 引おやぬき新徳の
去のふも程あさりあさりしちうらう

○撰集抄小新徳の生葉ふをわら
ちうらうあさりあさりしちうらう

とそもうらん後、何ふあさり

大和より山城を越え、近江路ありて美濃
路ありて守山中をさす。いふに書終
の場あり伊勢の守武、いふに義朝殿の
如く秋風とて、いふにさのあさりあさり
あさり

うらうの心ささり秋乃風

○評林 守武、ささりうらうの氣性の
ささりあさりあさりあさりあさり
一句の詮ささりあさりあさりあさり
海の秋風み酒をささりあさりあさり

歐陽永叔秋聲賦曰夫秋刑官也
於時為陰又兵象也於行為金是謂天
地之義氣常以肅殺而為心○説叢小
守武、理屈をささりあさりあさり
と秋風、義朝、心ささりあさりあさり
うらうあさりあさりあさりあさり
秋風のあさりあさりあさりあさり

ちりり○梅もめさる武千句も同くさる
 船の里之場さるんとさるあ白子月一
 敷み似さる秋風と附さる此附心も月
 又さるさるさる秋風と付さる船とさる
 さる一船と付さる月をさるさる船の許
 一さるさる義船と付さるさるさるの秋風
 さる一船と付さるさるさるさるさる
 兵象肅殺オのさるさるさるさるさる
 説義の流のさるさる義船と付さる秋風
 さる人も秋風と付さるさるさるさる
 いさる同さるさるさるさるさるさるの

句のさる一附付さるさるさる一白の上のさる
 似さるさるさるさるさるさるさるさる
 のさるさるさるさるさるさるさるさる
 さるさるさるさるの詞をさるさるさる
 さるさるさるさるさるさるさるさる
 さるさるさるさるさるさるさるさる
 原信頼大將も何せさるさるさるさる
 後白河上皇さるさるさるさる信西も
 御説さるさるさるさるさるさるさる
 さるさるさるさるさるさるさるさる

思ひ候西をさき人さき〜朝をさき〜
 義朝勢もあつて清盛をさき〜人自
 り平治元年十二月辛未大將ふさ
 合戦す信賴謀せらるる相違正月〜
 尾張國郡司めて長田忠宗も裁せらる
 時廿二日〜幕す〜朝毒常盤美人さ
 清盛もあきさ〜

不破

秋風や薨もさきけも不破の關

○新古今集も人すぬ不破にせまや
 の板もさき〜河さ〜信も只秋の風

大垣抄ゆり〜秋ハ本因〜家なほ〜
 と〜氏孫孫をさき〜時水〜〜心
 子おもひて〜旅さき〜
 志もさき〜旅孫の果〜秋の果分

○そ〜思ひ合す〜

素名本當寺也〜

冬牡丹子さき〜雪水な〜き〜

○琴白集も〜味〜の〜

冬の相ちさ〜味〜き〜定家の雛
 題古その中〜山〜み〜人
 本〜き〜あ〜あ〜

此頃ハ白濁のくろえ福の要なり物も
 何れもいふ人々甲おむのまじりしは
 ちしむ後也何れもの一字もそそ名も
 おくれぬさめらむしとて来折小
 こえとて此れ白の二字やうに物も
 折我れれ白の二字のちもく
 小文もをさむらうに河也百骸九穴敷
 の中も物はうらうらつけて風は坊
 といふ語よりしむれ風も破きや
 らんるをさむらやいれれ白を好
 らしむし終よ生産のたうとてしむ

下書
 此頃ハ白濁のくろえ福の要なり物も
 何れもいふ人々甲おむのまじりしは
 ちしむ後也何れもの一字もそそ名も
 おくれぬさめらむしとて来折小
 こえとて此れ白の二字やうに物も
 折我れれ白の二字のちもく
 小文もをさむらうに河也百骸九穴敷
 の中も物はうらうらつけて風は坊
 といふ語よりしむれ風も破きや
 らんるをさむらやいれれ白を好
 らしむし終よ生産のたうとてしむ

海をゆく舟のまはりにて

海をゆく舟のまはりにて

○古今抄五「舟をゆく舟のまはりにて」

海をゆく舟のまはりにて

天和のはのゆゑは是れ舟のまはりにて

求むる舟のまはりにて

舟をゆく舟のまはりにて

舟をゆく舟のまはりにて

○素帯は舟のまはりにて

舟をゆく舟のまはりにて

舟をゆく舟のまはりにて

舟をゆく舟のまはりにて

舟をゆく舟のまはりにて

舟をゆく舟のまはりにて

舟をゆく舟のまはりにて

舟をゆく舟のまはりにて

舟をゆく舟のまはりにて

舟をゆく舟のまはりにて

舟をゆく舟のまはりにて

舟をゆく舟のまはりにて

舟をゆく舟のまはりにて

舟をゆく舟のまはりにて

舟をゆく舟のまはりにて

あつちやあつちの修けが皆たまる

○二月堂の絹索院と号すなる、観音を

あつちの井は、あつちの玉を、あつちの神燈伽

を、あつちのふと云一とせ早しとあつちの産傳

井のわらうあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

梅林

梅のあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

○林和靖傳、林公通字君復、結廬西湖之

孤山、賜諡曰和靖先生、筆談曰、林逋、隱居

孤山、常蓄兩鶴、縱之、則飛入雲霄、盤旋久

之、復入籠中、逋常泛小艇、遊西湖、諸寺有

客至、童子出、應門、延客、開籠、縱鶴、良久、逋

歸、常以鶴飛為驗、○林和靖詩、疎影橫斜

水清淺、暗香浮動月黃昏、○素堂評、西湖

涵、あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

ころ 羨むくけ乃白のりゆめんる
 か〜〜〜〇 吉東抄みちま
 古義集みけ白を伝けて先師の之を
 ち〜〜〜は白を〜〜〜是ホも
 の心を釋〜〜〜毎くは白つわ〜〜
 とや秋風〜海防の富家もあらず
 吉東山家小国ありて詩奇を〜
 諸人を〜〜とて〜〜
 言ふも主と風給強其の人と思ひ〜
 ようは似る先師の心も傳説〜
 の心も傳説ありて後志をし〜

けは〜〜〜やけ詩を〜〜
 又白練の物〜〜
 子亥一巡の後評と〜
 櫻乃木の花〜
 〇 勢田三奇仙も一翫するも〜
 つ〜〜秋風〜
 〇 説書取も
 櫻の花の白〜
 伏見西岸寺任口上人も〜
 花の〜

ふまを屋張の國了る況を志しひ來るんた

○桑門、沙門の言柄を法恩珠林に詳也

いさしきまぬ徳をいさしき人 三千はくから

此僧やみ告く日圓覺寺の大顛和尚を
睦月のまゝめ近依志るやうに梅もやまの
心地せしめたるさうさう其角の許一やを引
梅くしきうおの花おやちうさうさ

○鎌倉圓覺寺大顛和尚俳名を呼ぶ

其角の許とすさうの新山家集にえり

梅くし睦月の近依をいお目めをてつる

ゆへ梅くしきうの花おをいさしき人

杜國おれらる

らけけいおをいさしき蝶の形んた

○杜國のいさしきをいさしき門人さう

いさしき相まをいさしきや東おれん

とすさう

牡丹蕊くくけいさしき蝶の形んた

○幽篁集にみさしきいさしき

いさしき相まをいさしき

いさしき牡丹蕊をいさしき蝶の

いさしきいさしきいさしき

況のいさしき相まをいさしき

抑痰喘之業昔より法の虫物もおぼく養業も亦に於て六種痰の云に及
 ねば痰痛をくもすも速になさるに於ては痰喘の飲之病と云も治
 ぐらめなり痰は其聖能丸は久き痰喘留飲を医藤子をしては百業を
 用ゆるといふも治せしむる能くも速に治し業予が亦石法と兼人を故く
 治るに一人として治せしむるは依て天下を収く一業兼て此小能一志うながし其
 切能速なるといふも下一業は其婦人養業兼後小用ひ害ありを知らず
 能く用ひ治るべき石法あるを知べしむるに於て痰喘業多く皆包紙未だ吟来し
 上た志るは石法所より求むる下り

東叡山 御書物所 江戸下谷御成道 青雲堂 英文藏製 青雲

東叡山	御書物所	江戸下谷御成道	青雲堂	英文藏製	青雲
系於之系	出雲古父及所	下法依系	正文書利多書	夏州福島	光白屋法二所
大坂の高	河内屋茂吉系	同福子	飯田屋利多書	日不	近江屋三十所
尾州名古	永来屋本四所	日高古	古屋劫次所	我及系	小田高俊多書
真山仙臺	浮勢屋本四所	夏州	料屋惣多書	上州言崎	浮本屋要多書
五ヶ所		二和書			

